

COFFEE BREAK

科学者と神様

上田良二

〒467 名古屋市瑞穂区弥富町山 33-5

(1986年5月14日 受理)

Scientists and the authority

Ryozi UYEDA

Maruyama 33-5, Yatomi-cho, Mizuhō-ku,
Nagoya-shi 467

(Received May 14, 1986)

「先生は園芸がお好きそうですね？」

「ええ、大好きですよ。花は神様がお作りになるから美しい。人間がどんなに頑張っても、造花ですから。」

「どんな花をお作りになるんです？」

「雑草の類ですよ。本には山草、野草と書いてある。」

「神様の作品に近いというわけ？」

「そうじゃない。バラも洋蘭も、最近はボタンも作りますよ。せまいから、少しばかりだし、下手糞ですがね。何でも咲いてみると造花とは違う。みんな神様の作品だから！」

「じゃあ、なぜ、野草みたいなものを？」

「説明すると長くなりますが。子供の頃から、身近にあって、親しみがあって、その中で、一番、美しいもの。福寿草とか、雪割草とか、エビネとか。ほんとうに良いと思いますよ。シャボテンの花なんか、鮮かだけど。違和感というほどではないが、親しみが湧かない。西洋の花は確かに華やかだけど。私には華やかすぎて。融けこむような親しさが無い。物理だって、私の物理は野草みたいでしょ？」

「超高圧電顕で、回折の相対論効果を発見したのは先生でしょ？ あれは野草じゃない。洋蘭みたいに見えますが。」

「限界電圧効果 (critical voltage effect) ですか。実を言うと、あれは本来の私の仕事じゃあない。私は大学を出て、西川正治先生——高エネ研の西川所長のお父さんで、菊池先生が菊池パタンを発見したときの指導者——の助手になったんです。先生は何も教えてくれなかった

みたいで、実はその逆だったんです。私の電子回折の仕事は、みんな西川先生の論理に乗っていた。クリティカル・ボルテージがその最後です。若気のいたりで、自分の仕事と思ってましたが。」

「じゃあ、その後の超微粒子からが、先生御自身の仕事というわけ？」

「それ以前に比べればね。金属の超微粒子を電顕で見たら、まるで、水晶や黄鉄鉱みたいに見えた。あんな美しい多面体が金属で見えるとは思わなかったから、造化に妙に驚嘆したんです。いま見ると、大した写真じゃないですが。」

「だって、金属の超微粒子は自然にはない。先生が実験室で作ったんでしょ？」

「いや。作ったのは私じゃなくて、神様なんだ。だから美しい、と思ったんです。神様は万能だから、総ての物をお作りになっている。ただ、人間の目につかない所にかくしてある。それを、たまたま電顕でのぞき見たというわけ。もちろん、神様は醜い物もお作りになる。しかし、美しいとか、醜いとかは、人間が勝手に言うことで、人間同志でも意見が一致するとは限らない。神様は人間がどう思うか、どう感ずるか、そんなことには、一切、おかまいにならない。とにかく、人間の業では、あんな小さな、あんな美しい結晶を作ることは出来ない。」

「それでも、最近では、モレキュラー・エピタクシーで、人工的に原子を並べている。原子を1個ずつ、狙った場所打ち込めるようになれば、超微粒子の結晶だって、人工的に出来るんじゃないでしょうか。少くとも、近い将来には、見込みがあると思いますが。」

「先日、或る人に会ったら、‘神様さえお作りにならなかった新物質の開発に成功した’、って言うんです。そこで、私は即座に反対して言ったんです。神様は万能だから、総ての物をお作りになってある。地球上に無いものでも、宇宙のどこかにある。宇宙の中に無くても、その外にある。人間がそれを知らないだけなんだ！ 貴君が成功したのは、貴君の方法が神様の御意に添っていたからさ！ 御意に反することを人間の力で成功させることは出来ないんだ！」

ここでセッション開始のベルが鳴る。

先生はもっと喋りたそうだったが、各々の席にもどる。